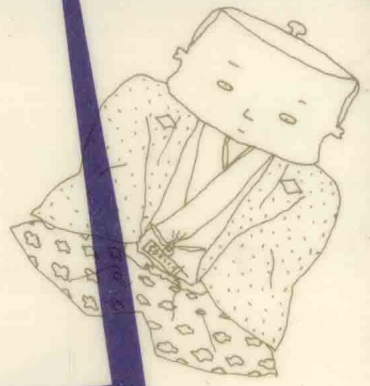


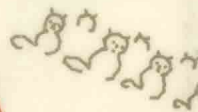


理論社

定価2200円(本体2136円)



ISBN4-652-01929-7 C0393 P2200E



今江祥智 の本

第29卷

紙のお月さま

理論社

今江祥智の本第29巻

一九九〇年三月初版

一九九〇年三月第一刷

著者 今江祥智 ©

発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(二〇三)五七九一〈代表〉

振替東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます。



ほのおの夜

7

兄ちゃんのいた夏

49

紙のお月さま

95

遠い声遠い日々

97

出会い

108

ふたりぐらしプラスわん

119

暮しの手帖——タマテバコ篇

130

小学校で

141

はしご日和

154

誕生日の秘密

165

雪としゃぼん玉

177

風に吹かれて

191

失恋について

203

宿題

215

明るい表通りで

226

あとがき

241

解説 いぬいとみこ

243

編集 小宮山量平

装幀 平野甲賀

装画 長新太

制作 山村光司

発行 鈴木良司

製作担当 金井重雄

下向実

編集担当 日比野茂樹

小林久美子

成澤米里子

製作 P & P

加藤文明社／よねむら写植

表紙 ダイニツク

カバー トラヤ印刷

製本 誠製本

用紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第29卷

ほのおの夜
兄ちゃんのいた夏
紙のお月さま

ほ
の
お
の
夜

そのころ。

1

洋は、兄ちゃんとフナをすくいにいくのが、とにかくたのしみだった。すぐちかくの東横堀川へすくいにいくのだったが、ひとりではいかせてもらえなかった。二度も川へはまった「前科」のある洋のことを、母さんはあぶながり、しんぱいだから、きつと兄ちゃんといっしょにいくことだす——と言っていたからだ。

兄ちゃんより早く学校から帰ってくる洋は、フナすくいの道具一式をそろえて、兄ちゃんの帰りを待ちわびる。兄ちゃんの魚すくい用のあみ（大きくて深くて、柄も長い）に、じぶん用の小さなあみ、それから、すくったやつを入れる小バケツ。

兄ちゃんは、洋がそんなふうにして待ちわびているのを知っていながら、わざとゆっくり帰ってくる。フナすくいなんて、六年生になって、そうそういけるものか——みたいな顔になる。おれに

はおれの友だちづきあいもあるんやさかい、そうそう弟のあそび相手になってられへんのや……みたいな顔になる。

洋は、ねだらなかった。ものほし気な顔をしなかった。ただ、玄関わきに、道具一式をそつとならべておくだけである。いやでも兄ちゃんの目に入る場所なのである。

兄ちゃんだって、洋のとしには夢中になった「あそび」だから、道具が目に入れば、気もちもうごいて、ついでにほとんど習慣みたいにもうごいて——あみの柄をにぎってしまふのである。

——ちょっとだけやぞ。

ねんをおすように言ってから、洋をおともにして出かけるのだった。

路地を小走りにぬけ、通りをわたり、東横堀川ぞいの家並みの軒下を歩くと、半町ほどで砂置場に出る。その横が石段になっていて、おりると、川っぶちに出る。南はいき止まりだったが、北へは川っぶちにそつてつぎの橋の下までなんとか歩いていける。ところどころ、川ぞいの家のベランダが出張っているが、そつとまたいで入り、そつとまたいで出れば通れなくはない。めんどろなのはその家の人に見つかったときで、顔見知りだと、

——おや、小松さんとこのぼんかいな。気ィつけなはれや。はまったらあぶないさかい……。
で、すませてくれるが、意地のわるいばあちゃんにでも見つかるよ、

——他人の家へ入ったらあかんがな。

と、「通りぬけ」を禁じられる。兄ちゃんは気が強いから聞こえないふりをして、そんなときでも通りぬけてしまうから、洋もあわててあとをおうことになる。ひとりでなら、とてものに、そんなまねのできる洋ではなかった。

フナはながれにのって、ゆらゆらうかんでいるわけだから、とちゅうですくいそこなうと、ながれにそっておいかけなければならぬ。ペランダの二つや三つであきらめることなどできなかった。兄ちゃんは川つぶちに近よらない「大物」すくいをねらい、洋は、川つぶちをちよろちよろするハヤだとかメダカだとかをすくって満足した。兄ちゃんはじぶんのあみのとどくかぎりのあたりに目をくばり、足もとの川つぶちのほうはおるすになる。ときたま、思いもかけずにそんなところに、てのひらほどのフナがういてくることがあって、そんなのを見つけると、洋はもうどきんとしてしまう。たいていは、むこうのほうに洋に気づいて、つぶんともぐって消えてしまうのだが、一度、てのひらくらいのをうまくすくいあげたことがあった。兄ちゃんでも年に何度もすくえないくらいの「大物」だったから、兄ちゃんは、すっかりつむじをまげてしまった。そんな大きなやつを、シロウトの洋にあげられたことにぎすついてしまったのであった。

そのあと三日間、兄ちゃんは洋をつれていってくれなかった。

それにこりて、つぎに洋が足もとに大きなフナがいるのを見つけたときは、そっと兄ちゃんの腕をつついて教えるだけにした。ところが、あんまり近くでは、兄ちゃんの長い柄がかえってじやまに

なつてしまい、もたついているまに逃がしてしまった。弟の手前、おなじしくじりをくりかえしては、兄貴の「權威」にかかわると思つたのか、それからは足もとのフナは、大小にかかわらず、洋にすぐわけてくれるようになった。

そんなフナをうまくすくいあげるたびに、洋はうれしくてどきどきしながら、

（兄ちゃんつて、氣前がええねンなあ……）

と思つてしまうのである。

（こんなええフナをゆづつてくれるんやさかいなあ……）

それにしても、ベランダのつき出た家は、ほんとにじゃまで、いやなものだった。ベランダのおかげで、ええフナを何匹すくいぞこなつたことか……。

それにしても、洋はやはりフナすくいのたのしみをあきらめる気にはとてもなれず、毎日のように兄ちゃんの帰りを待った。

*

また、しばらくして。

洋がそいつをすくいあげたとき、そいつのことを知らなかった。いや、なんという名の魚か知らなかったのである。とにかく大きかった。てのひらどころか、洋の左腕のひじから先くらいあるように見えた。洋は少しおびえた。あみに入りきらないことをおそれたのである。兄ちゃんは七、八

歩も先にいて、声をかけないと呼びもどせなかった。声を出すと、魚は逃げるにきまっていた。洋は両手であみの柄をにぎり、教室でも見せたこともないくらい「きんちょう」しきった顔になって、そいつにたちむかった。あみをしずめて、そいつがゆらりゆらりと胸びれをうごかしてよってくるのを待つのだ。息をつめ、そいつがあみのま上より少し手前までながれてきたとき、あみをあげるのだ。

真剣そのものの洋の目と、そいつの目が合った。そいつは頭をねじってもぐって逃げようとして—— まともにあみにつつこんでしまった。洋は両腕に力をこめてあみをあげた。柄がしなうほどのおもさであった。思ってもいなかった大きさとおもさに、洋は思わず、

— 兄ちゃん！

と、大声で呼びかけていた。せっぱつまった洋の声に、兄ちゃんは、てっきり洋が川にはまっていたすけを呼んだのかと思ってふりむいた。強い近眼の兄ちゃんの目にも、洋が川つぶちにいることはちゃんとみとめられた。それにしているにが——首をかしげながら、それでもかけよってくれたのと、洋がようやく「えもの」をあげたのが同時であった。

小バケツにはたてにしないと入りきらないくらい「大物」であった。

— これは、お前、コイやないか。どえらいもんをすくいよったもんや。

兄ちゃんがあきれたように言った。

—コイって、コイのぼりの？

—そうや、池に泳いどるやないか。

そう言われたものの、それが川にいるやなんて——じぶんですくいあげながら、洋はわけがわからなくて、ぽかんとしていた。

—入れ物が小さすぎてかわいそや、はよ、もってかえって用水にでも入れたらんと弱ってまうで……。

兄ちゃんがてきぱきと指示した。ふたりは小バケツからそいつがとびださないように、あみをかぶせて、ふたりがかりでやつともち帰った。

防火用水槽でも、そいつにはきゅうくつそうに見えた。ふたりがはしゃいでいるので顔を出した隣の江田さんとおじいちゃんが、

—これを、ぼんがその川ですくってきた？ うそだすやろ。

てんで本気にしてくれなかった。兄ちゃんがおこったように、

—いや、こいつがすくいよったんです。ぼくがちゃんと見てましたさかい、たしかなことだす。

と、保証してくれたので、江田さんもやつと、さやかァ……と、ふしょうぶしょう信じてくれたようなものだった。洋は、兄ちゃんではなくてじぶんが、こんな大物ずくいをやってしまったことをくやんでいた。なにかよくないことがありそうな、いやな「予感」がした。洋のその手（良くな